

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**  
**大学院学生研究**  
**2016 年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院 観光学 研究科 観光学 専攻		
<b>研究代表者</b> (2017年3月現在のもの記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	観光学研究科観光学専攻 博士前期課程1年		鍋倉咲希 印
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名
	観光学部准教授		門田岳久 印
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ 人文 ・ <input type="checkbox"/> 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
<b>研究課題</b>	アートプロジェクトが創る「関係性」 — 観光から見る市民参加の社会学的研究 —		
<b>研究組織</b> (研究代表者・共同研究者) ※2017年3月現在のもの記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	観光学研究科観光学専攻 博士前期課程1年		鍋倉咲希
<b>研究期間</b>	2016 年度		
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円		

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究はマレーシア・ペナン・ジョージタウンに描かれるストリートアートを対象に、アートプロジェクトによって形成される人やモノの関係性の多様性とその意義を明らかにするものである。地域型アートプロジェクトに関する先行研究は、プロジェクトにおいて形成される「関係性」を固定的・一面的に捉えてきた。しかし実際にはそこで築かれる関係性は一様ではない。アートプロジェクトをきっかけにストリートアートが増加するジョージタウンでは、プロジェクトの外部で観光事業者が作品や観光客と関係結び、自らの生活をよりよくしようと試みていることが明らかになった。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 観光 } { ストリートアート } { 関係性 }

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

### 1. 研究の背景と目的

本研究は近年国内外で増加する地域型アートプロジェクトを対象に、アートプロジェクトが創出する関係性の多様性とその意義を明らかにするものである。地域の社会的な問題解決を目指して市民やアーティストの協働が志向されるアートプロジェクトに関しては、文化政策論、美学、観光学など様々な領域から研究が行われてきた。初期の研究においてはプロジェクトによる経済効果や地域活性化を肯定的に評価していた一方、2016年以降の美学・社会学的な研究ではプロジェクトの安易な増殖と評価に対して、マイクロ・ユートピアの創出やアートプロジェクトの構造そのものの権力性を批判するような論考が目立つようになっている。

これらの研究はアートプロジェクトが地域にもたらす正負の影響を概略的に明らかにしているという点で評価できる。しかし一方で、アートプロジェクトが固定的な場や参加者を持つことを前提としているために、そこに参加する特定の人々の「コミュニティ」や「地域活性化」にしか注目していない。実際、地域で実施されるアートプロジェクトには、プロジェクトに参加しない住民やプロジェクト外でアートにかかわる人々が存在しており、アートプロジェクトを閉じた場として理解することは、人々の間に築かれる非対称的な関係性や力学を見落とすことにつながる(小泉 2012; Bishop 2004=2011)。そこで本研究では、アートプロジェクトにおける「市民参加」を観光という視点から捉えなおすことで、プロジェクトの時間空間外および参加者以外の人々が構築する関係性に注目する。アートプロジェクトをめぐる多様な関係性はいかに構築され、地域の人々にとってどのような意味を持つのだろうか。

本研究はマレーシア・ペナン島の州都ジョージタウンで開催されている George Town Festival (以下 GTF) というアートフェスティバルを対象とする。以下ではジョージタウンのストリートアートをめぐる多様な関係性を現地調査の成果から明らかにする。なお、本研究のデータは申請者が 2015 年 3 月から 2016 年 9 月までに行った 4 回の現地調査による(2016 年度 SFR 大学院学生研究は 2016 年 8 月 25 日から 9 月 6 日)。現地ではストリートアートをを持つ観光事業者(土産物屋・カフェなど)や GTF、遺産保護団体、地域住民らに聞き取りを行った。

### 2. ジョージタウンのストリートアートと地域住民の実践

多文化の混在が作り出すジョージタウンの町並みは、2008 年に「マラッカ海峡の歴史都市——マラッカとジョージタウン」として世界文化遺産に登録された。登録地域のなかにストリートアートが設置されたのは 2012 年であり、その後増加を続けたストリートアートの数は現在 80 にも達している。

ストリートアートがジョージタウンに初めて設置されたのは 2012 年に GTF で行われた『Mirrors George Town』という企画による。同企画ではリトアニア人のアーティストがペナンの日常生活を題材に世界遺産コアゾーン内に 9 つの作品を設置した。これを皮切りにジョージタウンにはストリートアートを求める観光客が現れ始めた。次の段階として 2013 年から最初の作品の影響を受けたアルメニアンストリート周辺の観光事業者がストリートアートを真似して設置するようになった。当時アルメニアンストリートには観光関連のお店は少なく、少数の店舗だけが友人などに依頼し、無報酬で作品を設置した。さらに 2015 年の夏以降、ストリートアートを対象とした観光は成長を続け、アルメニアンストリートでは観光客向けの新店舗が大幅に増加した。それらの新店舗はほぼ例外なく店の内/外壁にストリートアートを持っており、周辺地区はテーマパーク的な観光エリアとして発展した。そのなかでストリートアートは報酬を前提に、事業者からアーティストに依頼されるようになった。

### 3. アートプロジェクトを超える関係性

ジョージタウンのストリートアートは、時期を基準に 3 つのタイプに区分できる。すなわち①2012 年の『Mirrors George Town』、②2013 年以降と③2015 年以降に観光事業者が設置したものである。ここでは 3 つのタイプ間に見られる関係性の特徴を(1)観光のまなざしとストリートアートの増加、(2)観光事業者によるストリートアートへの評価、(3)町歩きマップが創り出す関係性の 3 つの視点から明らかにしたい。

#### (1) 観光のまなざしとストリートアートの増加【①-②③】

①が設置されたあとの②③の増加の過程において、観光客が果たす役割は見落とすことができない。観光客が観光地のあらゆるものに対して投げかける「観光のまなざし」は、観光地のホスト、景観、文化などを多様に変化させる(Urry and Larsen 2011=2014)。

もともと GTF の目的は世界遺産登録によって生まれた「文化遺産保護」や「地域の物語の保存」をアートという手段によって達成することであり、①の企画もそのなかで行われた。つまり①は本来、地域の人々あるいは観光客にジョージタウンの物語を伝えることができればよかった。しかし、実際にはそれらの作品に観光客が反応したことにより、ジョージタウンのアートをめぐる関係はアートプロジェクトの枠を出た。すなわち、観光のまなざしは観光事業者にビジネスのチャンスをもたらし、その結果ストリートアートは GTF と異なる文脈で増殖したのである。

このように、その地域にとっては一時的な存在にすぎない観光客もアートプロジェクトに影響を及ぼす。ジョージタウンでは、観光の影響によってプロジェクト期間外にストリートアートと地域の観光事業者、そして観光客の間に新たな関係性が取り結ばれた。

## 研究成果の概要 つづき

### (2) 観光事業者によるストリートアートへの評価【①-②③】

観光客の影響により GTF の枠を出て構築される関係性は、その目的の面でもアートプロジェクトの枠を出る。その例として、観光事業者によるストリートアートの評価をあげたい。

ストリートアートを設置する観光事業者のなかに学問的にアートを学んだ人はほとんどいない。しかしストリートアートが発展していくなかで彼らは町中の作品を評価するようになっていく。

調査のなかでストリートアートへの認識を尋ねた際、事業者たちは、文脈よりも質が重要であるとした。彼らの評価基準は、絵の質と観光客が作品の写真を撮る際にいかにインタラクティブできるかという 2 点にあった。

このような観光客目線の評価は、観光事業者が独自に考えたものであり、GTF の推進する価値とはなにも関係がない。①の『Mirrors George Town』はペナンの日常生活を表現しており、GTF はその点を評価したが、現在観光事業者たちが作り出している作品と評価軸は、アートを自らの基準で理解したものである。加えて、調査から観光事業者は GTF にほとんど興味がないことが明らかになった。つまり 2013 年以降のストリートアート増殖の過程では、ストリートアートが当初持っていた価値は消え、「観光のため」という新たな目的が付け加えられている。

したがってここで観光事業者たちはアートプロジェクトが設定したアートの価値観や目的、読み方に包摂されることなく、そこに自分たちの価値を滑り込ませているということがわかる。彼らは、観光客の存在を契機にアートプロジェクトの外部でアートと新たな関係を結んでいるのだ。

### (3) 町歩きマップが創り出す関係性【②-③】

ジョージタウンでは観光事業者間にも微妙な緊張関係が存在している。インタビューから明らかになったのは、新旧のストリートアートの間にある関係である。

現在、ストリートアートが見境なく増加している状況を見て、②の 2013 年から店舗を持っていた事業者は自分たちのアートを③の新しくできたものと区別する。後者は流行に乗っただけのものであり自分たちとは異なるという。その区別の基準として用いられるのが、ジョージタウンの町歩きマップである。現在、観光客が利用する主な町歩きマップは 4 つある。マップにはストリートアートやレストランが掲載されている。

観光客はその町歩きマップを利用して世界遺産指定地区内にあるストリートアートを探するため、マップに掲載されていないアートおよび店舗は、観光客にあまり認識されない。ジョージタウンにみられる新旧のストリートアートの差異化の意識は、この状況が地域の住民に内面化されることによって達成されている。したがって、町歩きマップの持つ権力性が観光エリアの店舗間に緊張関係を作り出していることがわかる。

## 4. ストリートアートと「流用」のふるまい

本研究ではジョージタウンのストリートアート空間の発展を事例に、観光という切り口からアートプロジェクトの時間空間的外部において形成される多様な関係性を明らかにしてきた。ジョージタウンでは、観光客がまなざしを投げかけることによって、アートプロジェクトではない場面でストリートアートが増加した。また増加するストリートアートのなかでは、観光に適しているかどうかというアートの新たな評価基準が作られ、さらには増加したストリートアートを持つ店舗の間には意識的な差が構築されていた。以下では、本研究の結論として、アートプロジェクト外部で生まれる関係性がいかなる意味を持つのかを明らかにしたい。

M.ド・セルトーは、支配的な立場にある生産者やエリートによって押し付けられたものを、彼らが意図したのとは別の文脈で用いることによって、本来の機能や意味を別のものにすり替える実践のことを「流用」と述べている(北垣 2009)。本研究を通して明らかになった観光事業者の活動は、アートプロジェクトの外部においてアートや観光客と、あるいは地域住民同士で新たな関係を結んでいるということが出来る。これはアートプロジェクトにおいて所与のものとみなされてきた「市民参加」を脱構築する彼らの「流用」のふるまいである。

アートプロジェクトに関する先行研究では、アートプロジェクトのもとで形成される関係性を空間的にも時間的にも固定的なものとして考えてきた。しかしプロジェクトで制作された恒常的な作品は、その後その地域の新たな観光資源として観光客の流入を促す。そこで当該地域の人々は、アートプロジェクトに直接かわらずともアートという新たな資源を用いて、自らの生活をよりよくしようと試みている。

一方で、これらの状況を、地域住民によるアートの能動的な解釈や先行研究が論じたようなアートへの市民参加による地域活性化として肯定的な目線で単純に捉えてしまえば、アートをめぐる非対称な権力関係を見落としてしまう。必要なのはアートプロジェクトで前提とされる「市民参加」を「関係性」として解体し個々の権力性について考察することであり、本研究はそのような視座の一端を担うものといえる。

※この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①なし

②なし

③なし

④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

・鍋倉咲希, 2016年度修士論文

「文化遺産観光と『流用』のふるまい——マレーシア・ペナンのストリートアート空間から」.

・鍋倉咲希, 「文化遺産観光と『流用』のふるまい——マレーシア・ペナンのストリートアート空間から」, 『第3回バックパッカー研究会』, 埼玉県: 立教大学新座キャンパス (2017年1月).